

新刊紹介



阿部芳郎著

『ウィと言えない「ゴーン改革」』
坂ノ下 征稔

日産自動車村山工場の跡地に立ってみると、南北ちょうど2キロメートル、東西約800メートルの広大な原野である。

村山村（現武蔵村山市）に生まれ、「砂川山」と呼ばれた武蔵野の雑木林と一面の麦畑を切り開き開始された村山工場建設を見、工業高校を卒業してその工場で働き続けてきた私にとって、原野に戻った跡地を見るのは特別の感慨がある。あそこがプレス工場、ここが車体工場、あのへんが組立工場、ここが自分の働いてきた機械工場のあったところ、と明確に指さすことができる。

その工場で組合分裂や集団暴力・差別とたたかい、労災事故で殺された何人もの青年たちを悼み赤旗を先頭に抗議の構内デモを繰り広げたことなどが昨日のように思い出される。

村山工場閉鎖によって、福島県いわき工場、栃木工場、追浜工場、座間工場、遠く九州工場へと配転になり、定年までの長期単身赴任を余儀なくされた仲間、転居していった仲間、心ならずも退職せざるを得なかった仲間たちのことを思うと心が痛む。私自身も定年までの最後の時期を毎日往復4時間かけて座間工場に通勤することとなった。

そして売り上げ急減で店を閉めた工場周辺の商店、仕事の減少と単価切り下げで廃業に追い込まれたり、経営悪化に陥った関連企業をみると「日産リバイバルプラン」がいかに身勝手なものであったか明白である。

カルロス・ゴーン氏は「日産リバイバルプラン」とそれに続く「日産180計画」によるいわゆるV字回復を『成果』にして、フランス、ルノー社の会長に凱旋就任するという。マスコミや財界はこぞってゴ-

ン氏を「改革者」とほめたたえ、小泉首相は勲章まで授与している。

だが真実はどうか。

多くの従業員を退職に追い込み、関連メーカーに犠牲を強要し、結果として購買力を減少させ国内販売は少しも増加していない。このような経営が長続きするはずもない。

三菱自動車のクレーム隠しやJ R西日本の利益優先の経営による重大事故、さらには大手橋梁メーカーによる長年の談合が告発されるなど、大企業の社会的責任の欠如が次々と明らかになっている。

こうしたなかで、本書は地を這うような取材で「ゴーン改革」がもたらしている実態を告発し「ルールある資本主義」の重要性を教えている。

(2005年3月・本の泉社刊・1400円)

(さかのした まさとし・

前JMIU日産自動車支部委員長)

大江洸・三上満・小林洋二著

『憲法—人生をかけて守るもの』

小川 薫

大先輩である大江さん、三上さん、小林さんたち歴代全労連議長が書いたこの本は、私たち青年層には難しいものかと思いましたが、読み始めると引き込まれるように一気に読み上げることができました。今の青年が体験できなかったことがいろいろ書かれていて、憲法があったから、紆余曲折を辿りながらも労働運動の前進を勝ちとってきたことを感じました。多くの人や組織と団結して国民的な大きな流れをつくることと革新自治体をつくり世の中のために声をあげることの必要性について改めて考えることができました。

今、自民党は07年を目途に「憲法改悪」をすすめています。これと一体となった「教育基本法の改悪法案」と憲法改悪を準備する「国民投票法案」の通常国会への提案を画して、国民世論に挑戦する「戦争する国づくり」を強引に進めています。

しかし、国民世論は「憲法を生かせ」「憲法9条を守れ」が多数を占め、戦争する国づくりと憲法改悪に反対する強い意志を持っています。

政府による「戦争する国づくり」と「構造改革」の推進は、「この国のあり方」が問われる根本的な国民との対決点であるだけに、国民的な共同のたたかいを大きくする条件を持っています。

この本を多くの人が読んで、憲法の素晴らしさを知ってもらいたい。また、その素晴らしい憲法が「政府にとって都合の良いもの」に変えられようとしていることも知ってもらいたいと思います。

憲法は「平和」だけでなく、「自由」「平等」「民主主義」そして「暮らし」など国民の生活を保障しているものです。もちろん平和でなければ安心して生活はできませんが、戦争しないことだけが平和ではなく、「安心して暮らせる」ことが平和であると感じました。今、自殺者が年間で3万4千人以上います。こうした社会が平和であるといえるでしょうか。環境問題や社会保障など、全てが充実してこそ平和であるこの本は言っているのではないのでしょうか。

タイトルの「憲法―人生をかけて守るもの」はまさにそのとおりであり、労働組合が憲法を守る意義がわかる一冊に出会えたように感じます。

もうひとつの日本をつくり、「歴史の1ページをつくる」そんな決意を読み終えた時抱くことができました。

この本に書かれていることを読むだけではなく、この大先輩たちと青年が語り合うことができた、年齢・世代が違って「目指すところは同じ」であり、「この運動に迷いはない」と実感できる気がしました。

(2005年3月・かがわ出版刊・1400円)

(おがわ かおる・全労連青年部長)

全労連編

『世界の労働者のたたかい 2005 年版』 藤吉 信博

本書は1994年に第1集が発刊されて、今年度版で11集となる。

本書のすごいところは、世界的に見ても類書がないということである。アメリカ労働省がアメリカの世界戦略を立てる必要性から各国の労働運動の現状のレポートを収録したものやLONGMAN社から不

定期的刊行されている『世界の労働組合』(“TRADE UNION IN THE WORLD”)などがあったが、労働組合のナショナルセンターが発行している例はないように思われる(幾人かの専門家に聞いてみたが「ない」という返事であった)。

本書の第1の特徴は、労働総研の国際労働研究部会のメンバーが全労連と協力して、10年以上にわたってアニュアルレポートとして刊行しつづけていることである。このことにより、20世紀後半から21世紀初頭にかけての世界の労働組合・労働者のたたかいが系統だって研究することができることである。2005年度版の執筆者は、労働総研・国際労働運動研究部会メンバーとして、岡田則男(ジャーナリスト)、面川誠(ジャーナリスト)、小森良夫(国際労働問題研究者)、木暮雅夫(日本大学教授)、齊藤隆夫(群馬大学教授)、坂本満枝(国際労働問題研究者)、猿田正機(中京大学教授)、島崎晴哉(中央大学名誉教授)、平井潤一(国際問題研究者)、宮前忠夫(国際労働問題研究者)、全労連から加藤益雄(全労連国際部長)、布施恵輔(全労連総合総務局員)の12氏である。

第2の特徴は、編集姿勢・分析視角である。全体的な編集方針は、アメリカの多国籍企業を中軸とする新自由主義的なグローバル化、アメリカの一国覇権主義的な軍事戦略のもとで、たとえば、本書が取り扱う2004年中に展開された世界36ヵ国・1機構の労働組合・労働者のたたかい、例えば、イラク侵略戦争反対、社会保障削減反対など、主要な労働組合・労働者のたたかいを紹介している。

紹介(分析)の視点は、第1集から堅持されているつぎの3つである。①闘争課題(要求)は何であったのか。②そのたたかいの組織・規模・戦術はどのようなものであったのか。③それらのたたかいの到達点はどのようなものであるか。10集からは賃金闘争や社会保障闘争、組織拡大の課題などが意識的に紹介されるようになっている。

第3の特徴は、本書がカバーしている国数の多さである。アジア地域では、韓国、中国、フィリピン、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、インド、パキスタンの9ヵ国。オセアニア地域では、オーストラリア、ニュージーランドの2ヵ国。北米地域